農　大　情　報

平成24年５月号
編集発行：愛知県立農業大学校

ニューファーマーズ研修が開講しました

４月27日（金）、ニューファーマーズ研修開講式が行われました。本研修は U ターン等で就農を目指す人を対象として、２月25日までの約10か月間にわたる長期研修です。

今年度の受講生18名のコース別内訳は、作物３名、野菜10名、花き２名、果樹３名となっています。

受講生から研修終了後に目指す農業経営の姿、この研修で身につけたいことを自己紹介で発表してもらいましたが、いずれの受講生からの発表も研修への意気込みが伝わってきました。（石代正義）

農学科学生への面接週間を設けています

農学科では、入学や進級の概ね一か月後に当たるゴールデンウィーク明けに「面接週間」を設け、グループ班長と専攻の指導職員による全学生への個別面接を実施しています。かつては「五月病」と言われ社会現象化しましたが、新しい環境への適応障害を起こし易いこの時期、学生が感じ、考えていることを個別にじっくりと耳を傾ける機会としています。

近年、出身高校や入学までの経歴の多様化、情報メディアの発達などにより、学生の考えや行動の幅が格段に広くなりました。そんな状況に対して、卒業後の進路、学習・生活相談だけでなく、専攻実習では把握しにくいことがらについても早い時期から知ることができます。

農大では、後継者や農業技術者の育成、農業関連へ就職対応に向けて、今後も個別対応を強化する予定です。（柳澤淳二）

長久手キャンパスで田植え実習が行われました

研究科１年生は５月16日から３日間、農業総合試験場作物研究部のほ場で実習を行いました。水稲育種の試験を体験する目的で行う毎年恒例の田植え実習です。新しい水稲品種を作るには交配を行い、有望な系統を選抜する作業が必要です。農業総合試験場では、毎年1500種類以上の育成系統を栽培していますが、それぞれの系統毎に数条ずつ、しかも１本植えで田植えをします。実習では、この作業を体験しました。

一般には機械植えしか行われていません

ので、この手植えの実習は、農業の基本を体験するよい経験となりました。また、収穫間近となった麦の生育調査や麦の管理作業の実習も行いました。

研究科１年生は、今後、専攻するテーマと所属する農業総合試験場の研究室を決め、研究科の学習に本格的に取り組んでいきます。（竹内賢寿）

後援会総会が開催されました

５月15日に農学科、同17日に研究科の後援会総会が相次いで開催された。

本校では、学生の学校生活を支援することを目的として保護者による後援会が組織されています。農学科後援会では、地域ごとに支部があり、それぞれ研修会を行い、教育の理解や支援、会員相互の情報交換を行っています。また、農大祭ではバザーを行い、収益を学生の福祉に寄与する活動などを行っています。

研究科後援会では、学生会活動の支援や教材・インターネット整備など学習環境の改善を行っています。

それぞれ新年度の事業計画と新役員が選任され、農大職員と連携して学生生活を支援する取組が始まりました。（山田勝）

追進館の学術調査が行われました

５月17日（金）、名城大学理工学部武藤厚教授、三浦彩子准教授両名が学生らと本学追進館の学術調査に訪れました。

追進館は、本校の前身である愛知県追進農場の大講堂として昭和10年に建築されました。

学内に現存する戦前の建物は僅かで、なかでも追進館は最古の木造建築物として歴史資料価値の高いものとなっています。

建築面積は506㎡と当時としては比較的大きな規模を有し、近代的な中柱を建てない大架構校舎建築の先駆的作品であると評価されております。

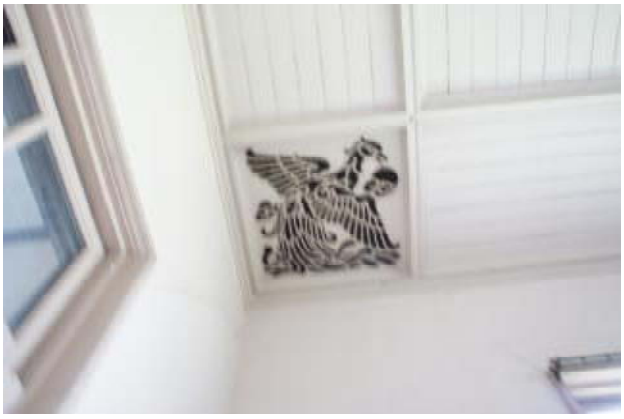
そのため、平成21年の調査に続き２回目となる今回の調査では、主に建築構造・材料、構造設計をテーマとして、当時の設計図書の閲覧等も含まれています。

昭和21年、昭和天皇が戦災で疲弊した国民を激励に巡幸されたおり、陛下の休息所として追進館の貴賓室が使用されました。

講堂の照明器具などの変更は認められるものの、これまでに大きな改修もなく建設当時のままに良き昭和のたたずまいを残しており、近年、NHK のドラマの撮影舞台にもなりました。

校名からは「追進」の字句は消えましたが、「後なる者は先なる者に追いつき追い越してゆかねばいけない。」とさとした追進精神は、現在もここで学ぶ若者達に脈々と受け継がれています。（渡邊俊介）

（追進館内部　太い柱が内側に張り出しており、広いスパンを支えている。）



（貴賓室天井の鳳凰の飾り）